

周辺からの記憶6

～2012年度のプロジェクトに向けて～

村本邦子（立命館大学）

2015年3月5～11日、ニューヨークにて家族漫画展を開催、3月8日には、NY「ほくほく会」（東北・北海道の合同県人会）による3.11追悼式にて、プロジェクトの紹介をさせて頂き、3月10日には、漫画展会場にて、プロジェクト報告会を行った。考えてみれば、不思議なご縁が連なっている。

そもそも、2011年3月11日の大震災直後、私は今回とまったく同じ経路で、伊丹から成田へ、成田からJFKへと飛んだ。その時は、NYを素通りして、鉄道でニューヘブロンへ行ったのだが、あれから4年も経ったとは信じられない。こんな形でプロジェクトが始まり、NYにまで来ることになるとは思ってしなかった。

さらに遡れば、その十年前、私はNYへ行く計画を立てていたのだが、出発前に9.11が起こり、周囲に猛反対されてキャンセルした。そんなわけで、NY市内に入るのは、今回が初めてだった。もちろん、ランドゼロや9.11メモリアルの見学もした。

もうひとつの偶然は、去年のむつプロジェクトには、むつ市長が顔を出してくれたのだが、彼は昨年5月に父親である前市長の急逝で帰郷するまで、NYの領事館に勤めていたという。プロジェクトとは別の話であるが、私と中村正さんは、今回、その領事館でプレゼンを行い、現地の在米邦人を支援している方々との交流会を持った。これは、2013年に台湾で南京プロジェクトの報告をした時に御一緒したNY市立大学の先生を通じて知り合った方のアレンジによる。何がどんなふうにつながるかわからないものだ。

腐れ縁というものもあるが、少なくとも自分に関して言えば、不思議なご縁が縁起していくのは、よいことが起きている証拠である。どこへ辿りついていくのやら、楽しみながら、素直に流れに身を任せよう。



南京プロジェクトから震災プロジェクトへ

災害復興は平和構築である。トラウマが人々をバラバラにしてしまうのだとすれば、復興も平和構築も人々をつなげていくものでなければならない。インドネシア、パキスタン、ソロモン諸島、ケニア、ミャンマーでの自然災害における人々の行動を調査した研究によれば (Ride & Bretherton, 2011)、レジリエンスの根源は、生き延びるために、人々が身を守り、互いに助け合い、団結することにあるという。外部からの支援団体はこれを認識し、尊重することから始めるべきで、「命令と統制」による中央集権的な支援はコミュニティの絆を破壊し、格差や差異による構造的暴力を進行させる。

すでに書いたように、東日本大震災が起きた翌日、立命館大学で日本集団精神療学会が開催され、歴史のトラウマをテーマにした招待ワークショップを担当した。

＊周辺からの記憶 1 :

<http://humanservices.jp/magazine/vol15/37.pdf>

歴史のトラウマが世代間連鎖によって家族や社会に否定的影響を及ぼしていくことに対して修復を試みようというもので、その小さな取り組みのひとつとして、日本の若者を南京に連れて行き、中国の若者と一緒にワークショップを行うことをやってきた。ホロコースト・サバイバー2世であるユダヤ系アメリカ人、アルマンド・ボルカスは、戦後世代のドイツ人とユダヤ人の和

解のために HWH (Healing the Wound of History : 歴史の傷を癒す) という手法を開発し、葛藤を抱えるさまざまな文化集団に応用してきた。

ファシリテーターとしてボルカスを招き、南京にて4日間の集中ワークショップを2009年、2011年と実施し、2012年4月28日には、その成果を踏まえ、立命館の平和ミュージアムで、国際シンポジウム「人間科学と平和教育」を開催した。これらの取り組みについては、ネット上に報告書がある。そこから得られた知見が、そのまま震災プロジェクトに活かされてきた。

＊戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を想起こす 2009」の記録 :

http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html

＊歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み～国際セミナー「南京を想起こす 2011」の記録 :

<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/mo-del3.html>

＊人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から :

<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>

今も昔も人生とは苦悩の連続である。人類の長い歴史において、災害や戦争の発生とその影響はすでに織り込み済みのものであり、宗教や芸術などの力に依りながら

人々は苦悩を超えて生き延びてきた。それに対して、トラウマ・モデルは、苦悩を因果論的科学思考で捉えようとするものであり、原因と結果が一对一対応するようなシンプルな問題である場合は見えやすいが、苦悩が長期化し複雑化した場合にはそう簡単にいかない。Root (1992) は、女性が置かれた構造的暴力に対して「潜行性トラウマ」という概念を発展させたが、歴史のトラウマが普遍的な問題であるとすれば、病理モデルを脱し、これを文化と社会の再構築という視点から捉え直す方がふさわしいかもしれない。

国際的・学際的協働によって展開されてきた南京プロジェクトを通じて得てきたことは、

①具体的な顔と名前を伴った出会いによって犠牲を記憶する、すなわち「記憶の人間化」(小田、2011)によって分断を修復していくこと

②社会的・歴史的苦悩を自らの生と繋がる現実の延長として捉えることのできる「社会的身体」(村川、2011)を育むこと

③出来事の悲惨さだけでなく、しなやかに生き延びていく力(レジリエンス)や抵抗にも焦点を当て、そこから学び、それを強化していくこと

④ひとつの大きな物語としてではなく、矛盾を含む可能性にも開かれた多様で豊かな小さな物語を束ねたポリフォニック(多声的)な歴史を共有することによって、共通の歴史を紡ぎ出していくこと

⑤このようなことが起こるための舞台設定が必要であり、図(介入手法)と地(介入に付随して起こること、「縁」)の両方に着目する必要があること

⑥結果的に形成・強化されていく「縁」のネットワークが来るべき未来の苦悩のセイフティ・ネットとなっていくこと

であった。

東日本・大震災の始まりは天災であったが、そこから引き起こされた甚大な被害には人災の側面が大きく、これを戦後日本の復興の帰結とみるならば、東日本の復興はこれを繰り返すものであってはならず、私たちに反省と修正を求めるものである。過ちを繰り返したくはない。

サービス・ラーニングとして

初年度は、このような舞台設定を行うためにエネルギーを取られた1年だった。確かな前進はあったものの、宮城はゼロからのスタートだったし、岩手もまだ確定的ではなかった。それでも、2年目は1年目より良くなるだろうという楽観主義に基づいて、2012年6月26日に院生向け説明会を兼ねた第1回目の研究会を開いて、初年度の状況を報告するとともに、メンバーを呼びかけた。

前年に引き続き研究推進、支援活動補助の助成金申請を行うと同時に、これを新たに研究科のサービス・ラーニングとして位置づけることで、教育の質向上予算に応募

してみることにした。十年続けるうえで、単年度ごとの助成金応募は辛い。助成金の有無に関わらずプロジェクトは続けると決めているにせよ、どの程度の規模で実施できるか計画を立てにくいからだ。

結果的に言えば、プロジェクトを院生教育の一環として位置づけたものが、この後のもっとも安定した資金源となることになった。長期的に続けられるものにしていくには、やはり、本来の仕事の延長線上に乗せることが重要なのだと思う。この原則は、他の機関における取材でも確認できている。これは、危機を日常化し、統合するということを意味するのだろう。

サービス・ラーニングとしての観点から初年度のプロジェクトを振り返っておくなら、参加メンバーは、院生6名、教員7名、職員（心理教育相談センター・カウンセラー2名を含む）3名が参加し、現地にいる修了生1名も部分的に加わってくれた。実施に先立って、7月にはシンポジウムを開催し、震災後初期段階の現状を学ぶと同時に、大学の役割について議論した。

宮城での実施は実現せず、9月青森、11月岩手、12月福島でプロジェクトを実施し、10月と2月に報告会を実施した。11月には、被災地で活動をしている支援者たちとともに、アメリカ、中国、ベトナムからもゲストを招き、対人援助とコミュニティ介入や中長期に向けての支援のあり方について議論した。シンポジウムの報告は、震災プロジェクトのHPに見ることができる。

＊11月13日 東日本大震災復興支援シンポジウム：

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/si>

nsaiprject/sinsaiprject-sympo.html

現地でのプロジェクト参加院生には、事前レポート、フィールドノート、活動報告書、HP用原稿の提出を義務づけたので、活動報告書から院生の学びが読み取れる部分をピックアップして分析した。詳細は報告書『大学院におけるサービス・ラーニングを取り入れたプロジェクト型教育の試み「東日本・家族応援プロジェクト」2011～2014年の成果と課題』にあり、これもHPで見ることができる。

＊大学院におけるサービス・ラーニングを取り入れたプロジェクト型教育の試み「東日本・家族応援プロジェクト」2011～2014年の成果と課題：

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/si/nsaiprject/sasshi2014.pdf>

院生たちの学びのなかでも、マスメディアを通じてはわからない五感を通じた被災地の状況理解が、初年度の大きな特徴だった。院生たちはこれを「肌感覚」と表現したが、「被災地で迎える夜の暗さ」「石柱が川に落ちていたり、柵が途中でなくなってしまっていたり、マンションらしきものの基礎の鉄骨が折れているだけでなく、流れるように曲がっていた。津波の引きの強さを実感した」「今なお民家が少なく、復興が追いついていない現状を再確認した」「新聞やテレビからは見えないそこにある悲しさ・淋しさ・怒り…そのようなものを肌で感じた」など、「被災のインパクト」を指摘すると同時に、「工場がすでに稼働しているなどのような力」「帰路会った女

子高校生の笑顔、夜の道路で渋滞している車、真っ暗な空に力強く上がる工場の煙突からの煙、11月中旬オープンのお店看板…から復興の息吹・人間の力強さも感じることができた」など、「復興への兆し」に着目していた。

私自身も、阪神淡路大震災の1週間後、被災地に入った時の身体感覚は生々しく残っているが、被災地に身を置いて感じることは、上述したような「社会的身体」を育むことにつながるだろう。

初年度は、東日本大震災がもたらしたものに圧倒されながらも、できることを考え、それを実現するために膨大なエネルギーを要したが、2年目は、もう少し余裕をもって、院生たちの教育としても充実させるよう、研究会・報告会の機会を増やし、学んだことについて共有したり、省察するための時間を設けることにした。合わせて、年度末に成果を振り返るための記述式アンケートを取ることにした。

2012年度のプロジェクトへ

こうした準備を経て、2012年度後半期より、2巡目の東北巡回が始まることになる。2年目からは、初年度より連携し、経済的支援も頂いていたきょうとNPOセンターからの提案があつて、京都の避難者に向けたプログラムが追加された。2012年は6回の研究会・報告会を実施することになったが、第2回目の研究会では、きょうとNPOセンターの方を招いて、避難者の様子について事前学習することにした。

つづく

<文献>

小田博志(2011)「南京と『和解』～歴史の深淵に橋をかける」村本邦子編『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み』立命館大学人間科学研究所

村川治彦(2011)「一人称から歩み直す『戦争体験』～体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて」村本邦子編『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み』立命館大学人間科学研究所

Ride, A. & Bretherton, D., (2011)

"Community Resilience in Natural Disasters", Palgrave Macmillan.

Root, M. P. (1992) Reconstructing the Impact of Trauma on Personality.

In Brown, L. and Ballou, M. (Eds.).

"Personality and Psychopathology: Feminist Reappraisals". pp.229-265.

New York: Guilford.



セントラルパークの回転木馬(1871年設置)